

組織の力、注目の取り組み

特集 1 P1~P4

2014年度東海大学新任教員 フォローアップ研修会 開催

- 基調講演
- プログラム紹介
- 出席教員アンケートより

■ 新任教員を対象とした 教員活動へのICT活用セミナー 開催

FD研究会等開催報告 P5

- 国際文化学部
- 農学部・農学研究科

生徒の立場に立った P6

「個別指導課題1」への対応

- 工学部土木工学科

S-NaviとLS新体制スタート P7

18号館にて有機的に連携

特集 2 P8

JMOOC講座開講に向けて (Japan Massive Open Online Courses)

- 「海から考えるこの星の未来
: 海洋学への誘い」

東海大学山中湖セミナーハウスにて、「2014年度東海大学新任教員フォローアップ研修会」(2014年8月21日~22日)が開催され、医学部を除く52名の新任教員(過去欠席者も含む)が出席しました。2日間にわたるプログラムを通じて、本学の教育の理念及びFDに関する実践的理解を出席者全員で共有することを目的としています。今年度も多様なプログラムが進められる中、副学長(10月より学長)をはじめとする多くの役職者がファシリテーターとなり、「グループ懇談会」や「模擬授業」が進められ、参加者同士の積極的な多くの意見交換が行われました。

本研修会は、当初、湘南校舎での数時間の研修会としてスタートしましたが、より充実した研修とすべく、会場を東海大学山中湖セミナーハウスに移し、宿泊研修として開催して3年目になります。その結果、様々な場面で新任教員同士だけでなく、新任教員とファシリテーター、そして講演を担当した教員との交流が深められるようになっていきます。



■引き締まった空気の中、研修会がスタートしました。

今号の『COMMUNICATION NEWS UP』では、2014年度東海大学新任教員フォローアップ研修会での山田清志副学長(現学長)の講演内容の一部をまとめましたので、ご一読ください。

また、各研究科、学部等で開催されているFD研究会の開催報告や附属推薦入学推薦候補者を対象に課された入学前教育「個別指導課題1」への対応、学習支援室S-Navi、JMOOCといった各取り組みについてご紹介します。

2014年度東海大学新任教員フォローアップ研修会

2014年8月21日～22日 山中湖セミナーハウス

基調講演

山田清志 副学長 (2014年10月1日より学長)

皆さん、おはようございます。学長からも話がありましたように、夏休みの貴重な時期に研修会にご参集いただきまして改めて御礼申し上げます。

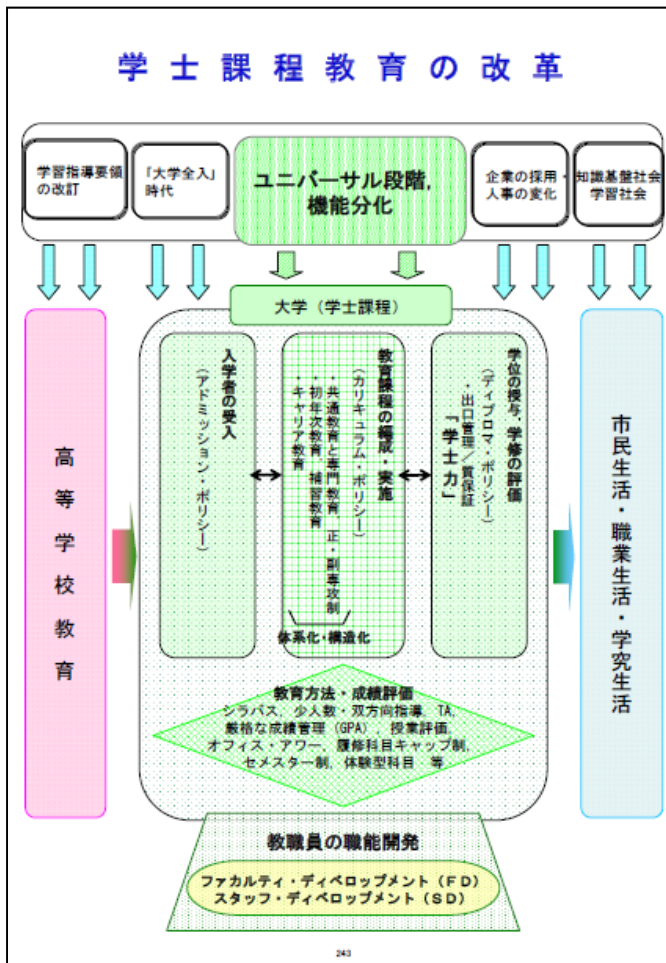
先程、学長から大学の使命、大学改革、教育と研究の問題についてお話がございました。今回配付した資料の中に、今の大学の状況を表す文部科学省の資料(図1)がございませう。先生方もご承知のとおり、高等学校教育から社会に出していく、その間に大学があるわけでございます。大学においては、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの3つを各大学で明確化し、育成すべき人材像を学生や社会に対して明確に打ち出していくことが使命となっています。そのための教職員の職能開発ということで、ファカルティ・ディベロップメント(FD)とスタッフ・ディベロップメント(SD)が挙げられており、今日の研修会は、早い段階でのFDの機会だとしてご理解いただければありがたいと思います。

私は、教育担当副学長ですが、以前は、国際担当副学長をさせていただいておりました。ハワイ東海インターナショナルカレッジに6年近く勤務しておりましたし、その前はデンマークにありました東海大学ヨーロッパ学術センターに3年近く勤務しておりました。30年近い勤務歴の中で3分の1は海外に勤務しているということになります。



山田清志 副学長
(現 東海大学 学長)

先程、高野学長から、教育の重要性もありますが、研究の重要性もあるというお話をさせていただきました。私からは、どんなことで大学のランキングが決まっているのかということについてお話をさせていただきます。国内の大学ランキングは色々ございますが、グローバル化、大学の世界展開ということでは、国内の大学ランキングで1位になっても、海外では全然評価されません。世界大学ランキングには主なものに、中国・上海交通大学のARWU、英国・THE、英国・QSがあります。英国・THEとQSによる東海大学の世界大学ランキングの軌跡をみると、2005年は233位、2006年は322位で、今となっては眩いばかりの良い評価でありました。この頃は、いわゆる我々にとって、ターゲットとするにはちょっと高いと感じている国内の大学は700位以下であったことからわかるように、それくらい東海大学は良い評価をいただいていた。ところが、その後どんどん順位が落ち、悲しいことに2013年は701+という括りでした。QSアジアの大学ランキングは、アジアの大学のランキングでございます。2009年には86位でしたが、2014年は149位です。こちらは、世界大学ランキングよりは、順位を維持しているかなという感じはします。しかし、世界大学ランキング、アジア大学ランキングをみていただくとわかるように、順位が前年度より良くなっている年が一つもない。つまり、低落傾向にあります。



(図1) 2014年度東海大学新任教員フォローアップ研修会 基調講演資料

出典: 文部科学省ホームページ

(http://www.next.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_007.pdf)



プログラム紹介 1日目

※役職は、開催当時のものです。

■ 開会挨拶

内田晴久 所長(教育支援センター)

■ 学長講話

高野二郎 学長



高野二郎 学長

(学校法人東海大学 副総長)

■ 基調講演

山田清志 副学長(教育担当)

■ 「歴史は大観すべし」

DVD上映

■ 建学の歌・校歌について

梶井龍太郎 学長補佐

■ FDに関して(授業について)

山本義郎 次長(教育支援センター)

■ モデル授業「現代文明論1」

吉田厚子 教授(ティーチングアワード受賞者)

総合教育センター現代文明論担当主任)

■ 体験で学ぶ 4つの力(自ら考える力 集い力 挑み力

成し遂げ力のアクティブ・ラーニング)

園田由紀子 講師(チャレンジセンター)

■ グループ懇談会 Part1、Part2

「今、困っていること等話し合う」



プログラム紹介 2日目

※役職は、開催当時のものです。

■ 模擬授業



■ 研修の振り返り(グループ代表発表)とまとめ

■ 閉会挨拶

橋本 巨 副学長(研究担当)

世界大学ランキングでは、アメリカが圧倒的に優位であります。それは、英語で発信するためだという議論もありますが、では、イギリスはどうかというと、それほど優位性を誇示していません。逆に言うと、アメリカは大学が大衆化しているということで、イギリスはどちらかというとエリートを作っていくという意味で分母が小さいからなのかもしれません。私は、アメリカが世界大学ランキングで圧倒的に優位なのは、大学を評価するときの基準がアメリカのアクレディテーション(大学認証評価)に代表されるような基準に依拠しているからではないかという推察をいたしました。そこで、東海大学としてはアメリカのアクレディテーション取得に挑戦してみようと考えております。学内外からそんなことができるのかというお声は頂戴しておりますけれども、取得だけが目的ではなくて、その過程で、大学の国際通用性、国際競争性を高めていきたいと考えているのであります。世界大学ランキングでも、各国の先生方が東海大学を知っているか否か、1回クリックしてくれるかどうかで、随分順位が違ってきってしまうわけでありまして。そういった意味では、学長が海外の大学の学長と握手をしてメモランダム等を交わただけでは、大学の認知度を世界的に上げるのは難しいわけでありまして。むしろ、今日、お集まりの先生方が何らかの機会でご東海大学を知らしめていただくことが、世界的な認知度が上がる遠いようで一番近い道なのではないかと思っております。先生方におかれましては、国際標準を意識された教育・研究活動に取り組まれることを期待いたしております。

出席者全員で記念撮影を行いました。

(出席者多数のため、2回に分けて撮影)



A～Dグループ



E～Hグループ

出席教員アンケートより

研修会終了後、出席教員を対象にアンケートを実施したところ、出席教員の92%から、出席して「大変良かった」または「良かった」と回答がありました。また、特に良かったプログラムについての設問では、「模擬授業」、「グループ懇談会」、「体験で学ぶ 4つの力」等のグループワークや体験型プログラムが、多くの回答を集めました。

アンケート回答の一部をご紹介します。

海洋学部 W先生

■プログラム名:FDに関して(授業について)

ミニッツペーパーを活用していき、学生の理解度を確かめながら進めていくようにしたいと思いました。

体育学部 H先生

■プログラム名:体験で学ぶ 4つの力(自ら考える力 集い力 挑み力 成し遂げ力のアクティブ・ラーニング)

アクティブ・ラーニングを体験でき、教員と学生の両方の視点に立って物事を見ることができた。授業以外のグループワークでも活用できる。

基盤工学部 S先生

■プログラム名:グループ懇談会

他学部の先生方の様々なお意見を聞かせていただき、大変貴重な時間を過ごすことができました。講義の問題点の改善策を見い出すこともできました。

国際文化学部 U先生

■プログラム名:模擬授業

テーマの異なる先生の講義にもかかわらず、内容をグループメンバーに伝えようとする工夫が全ての教員に見られた。その方法は非常に刺激的で、自分の実践にも応用できるようなことばかりであった。

理学部 A先生

■プログラム名:モデル授業「現代文明論1」

学生と教員の距離感が素晴らしいと思った。自身の授業に取り入れたい。

情報通信学部 M先生

■プログラム名:グループ懇談会

カジュアルな話も多くでき、楽しめました。意識共有ができた点が最も有意義でした。

健康科学部 K先生

■プログラム名:模擬授業

色々な分野の話がきけて知的好奇心が刺激されました。自分の授業を振り返る良い機会になりました。

課程資格教育センター I先生

■全体を通して

全体的にとっても良い研修会であったと思います。様々な形の教員同士の交流はもちろんですが、大学の歴史を学ぶことができたことが良かったです。

新任教員を対象とした「教員活動へのICT活用セミナー」開催（湘南校舎） 教育支援センター・総合情報センター

効果的な授業を展開する上では、ICTの活用に必要な期待が寄せられています。東海大学では、e-LearningをはじめICTを活用した授業支援システムが整備されてきています。しかし、これらを活用し、使いこなす教員は必ずしも多くありません。そこで、教育支援センターと総合情報センターでは、2014年10月15日に、特に新任教員のフォローアップを目的として「教員活動へのICT活用セミナー」を開催しました。授業や学生支援に直接関わる情報システムについて、総合情報センター稲葉 毅次長及び教育支援センター山本

義郎次長が、実際にPCを使用した操作説明を行いました。セミナーの最後には、総合情報センター長 幸平所長から、次年度に導入が予定されている新授業支援システムについて、変更点等も含めた説明が行われ、今後の一層の有効活用への期待が述べられました。



■コンピュータ室で実施されました。

主なプログラム

- メール機能について
- 教職員ポータル機能について
- 授業支援について
- 学生の学修指導支援について
- 研究活動支援について

セミナーを収録したDVDを貸し出しています(学内のみ)。

問い合わせ先:教育支援センター教育支援課
shien@tsc.u-tokai.ac.jp

FD研究会等開催報告

各研究科、学部、センター等では、FD委員会を中心に様々な視点から企画されたFD研究会等が開催されています。今年度、「国際文化学部」及び「農学部・農学研究科」において開催されたFD研究会等について、ご報告いたします。

国際文化学部 主催FDセミナー

本当の「ゆとり教育」について話そう

講師：寺脇 研 教授
(京都造形芸術大学、元文部科学省大臣官房審議官)

開催日：2014年5月29日

場所：札幌校舎 N212教室

報告者：国際文化学部デザイン文化学科
伊藤明彦 教授

寺脇氏は、『ミスター文科省』として知られ、ゆとり教育を推進した顔として著名であり、現在は、京都造形芸術大学教授として、教育の現場に携わるとともに、全国の学生との対話など、若い意欲と創造性を育む活動にも活発に取り組まれています。現、大学生は、まさに「ゆとり」世代の教育を受けた当事者でもあります。学力低下などが弊害としてあげられ、教育改革は方針の変更を迫られることになりましたが、「ゆとり」世代が在学している大学の状況に対して、寺脇氏自身は大きな期待を頂いており、考える力を備えた行動力のある若者が育っているという実感を、全国で出会った高校生や大学生から日々、実感しているという紹介がされました。

我々は、本当の学力とは何か？という問いについて、再度、考察して、大学教育の使命を再認識しなければならない立場に立たされているといえます。2002年の高校生からは、完全週休2日＋総合的学習の時間を導入した「ゆとり」世代になります。しかしながら、大学の入試制度を変革することは困難な課題であったことが、「ゆとり」教育の成果を阻んだひとつでもあります。

一方で、自分で考える、自分で何とかする、という高い志を持った若者は、東北の被災地にいち早く駆け付けた学生などに見られるように確実に育っています。実際に勉強は嫌いだと主張する高校生も、学ぶことは好きだと答えることが多いです。今後は、東京大学がAO入試を導入するなど、ますます個人のための学びが重要になってくると考えられます。子どもたちが大人と話ができるようになったことは大きいです。いつでもどこでも学びにアクセスできるということが、生涯教育を含めた広い意味での教育の方向性になるのではないのかという視点が示されました。

質疑では、学びの改革から取り残された大人が、より深刻な課題を抱える世代ではないかという指摘や、地域の拠点づくりに繋がる大学の役割、また、社会システムの変革に応じたイノベーションの重要性などが議論されました。

農学部・農学研究科 FD研修会

授業改善および学生指導に必要な ユーモアのセンスを養うために

講師：古今亭菊寿 師匠、古今亭菊生 師匠、
古今亭ちよりん さん(社団法人落語協会所属)

開催日：2014年8月22日

場所：阿蘇校舎 農学基礎教育センターA307教室

報告者：農学部応用植物科学科
松田 靖准教授

農学部合同FD研修会として、3名の落語家さんによる落語会が開催されました。おそらく、皆さん不思議に思われていることでしょう。「なぜFDで落語を？」この思いは漸をされる落語家の方も同じだったようで、「落語の後に『質疑応答』の時間なんて初めてで…。そもそも大学の先生方からの質問に答えられるかどうか…。」というところから始まったのですが、今年ですでに3回目の開催を迎えることとなり、回を追うごとに質疑応答の時間が長くなっています。

3年前にこの研修会で初めて落語に触れた時、ふと思いついた言葉がありました。「教師は役者でもある。」教育実習でお世話になった高校で、実習終了時に頂いた言葉です。伝えたいことをどう伝えるか、いかに生徒に興味を持たせるか、その意味で教員は役者でもあることを意識しなさいと。座った状態に限定されながら、落語は複数の登場人物を演じ分ける独り芝居。そこに手拭いと扇子という小道具でイメージを膨らませ、演目の世界に観客を引き込んでいくのです。さらに「まくら」と呼ばれる本題に入る前の導入部分に工夫を凝らし、観客の気持ちを掴んでから本題へ誘導する流れは、そのまま授業改善のヒントとなるのではないのでしょうか。

「どこをどうやって自分の講義に生かそうかを考えながら落語を聞く」というのは、正しい落語の楽しみ方ではないかもしれませんが。でもまだまだユーモアのセンスが足りない私には、継続していかなければならない課題のようです。



■農学部・農学研究科 FD研修会の様子

生徒の立場に立った「個別指導課題1」への対応

工学部 土木工学科の取り組み

「2015年度付属推薦入学」推薦候補者を対象に入学前教育「個別指導課題1」を課しています。今年度より、提出された課題を評価(不合格の場合は再提出)することになりました。

今号では、かねてより「個別指導課題1」において、生徒の立場に立った対応と指導を行っている、土木工学科の笠井哲郎主任に、入学前教育、初年次教育についてお話を伺いました。



工学部土木工学科主任
笠井哲郎 教授

■「学科別アンケート」「個別指導課題1」について

推薦候補者説明会の面談で使用される「学科別アンケート」実施の判断については学科に任されていますが、土木工学科では積極的に活用しています。それは、土木工学科を希望する生徒であっても、土木工学への理解度に差があるためです。その辺りの状況を事前に把握した上で面談をした方が良いという考えから実施しています。

「個別指導課題1」は、土木工学が具体的に社会にどのように役立っているかを認識することができるように、土木構造物や施設を自分で観察し調べてまとめる内容としています。また、単に課題を提示するだけでなく、取り組むにあたってのメッセージをつけ、入学前も気軽に相談できることが伝わるように工夫しています。

■生徒の立場に立った「個別指導課題1」への対応

昨年度は、大学で指定された様式とは別に、教員の顔写真付きでコメント欄の大きい様式を用い、2名の教員が提出された課題についてそれぞれコメントを書き、巡回指導時にフィードバックしました。これは、生徒が取り組んだ課題に対し、3、4行のコメントを返すだけでは入学までのモチベーションを維持することが難しいと考え、学科で検討して作り出した方法です。生徒に「一生懸命見えています。入学後も安心です。」といったメッセージを伝えることができたのではないかと思います。

今年度は、提出された課題の合否判定をすることになったため、生徒自身に提出課題の「良い所と悪い所」がより具体的に伝わりやすく、また評価する教員による差異が生じない方法を検討し、学科独自に評価表(図1)と評価基準を作成し実施しました。付属高校の先生にとっても事前にこのような評価項目が示されていれば、指導もスムーズになるのではないかと考えています。大学教員も付属高校の先生方とコミュニケーションを取り、一緒に努力することが必要だと思っています。

■初年次教育について

社会情勢等の変化により10年程前から、土木工学科という名称では志願者が集まりにくくなり、学科名称を変更する

大学が多くありましたが、東海大学では、土木の歴史等を踏まえ、検討の結果、名称変更は行いませんでした。そうした中で現実問題として、志願者が減少し、新入生の学力差が大きくなったため、土木工学科独自の取り組みを行い、初年次教育に力を入れてきました。例えば、基礎的な数学の授業では複数の教員でテキストを作成し、学生の反応を見ながら、約7年をかけて毎年少しずつバージョンアップさせてきました。このような取り組みが軌道に乗り、現在では、入学時の基礎学力を考慮したクラス分けと授業内容を厳選することで、後の専門科目に対応できるようにしました。

また、付属高校の先生方と接する中で、土木工学科への理解が不十分なことが不人気の理由の1つだということがわかってきました。このため、5年程前から、できる限り土木工学の分野について生徒や先生方に説明する機会を設けてきました。ここ数年、志願者が増加しているのは、少しずつではありますがその効果が出てきたものと考えています。

■反応を確かめながら少しずつでも改善

土木工学科では、入学前教育、初年次教育について、一度、面談や教育を実施してみて、その反応を確かめながら、次年度は少しずつでも良い方向へ改善していくという努力を惜しんでいません。学科の会議では、1年間のスケジュールを全員が認識し、タイムリーに改善・修正について十分に検討できるよう、取り組んでいます。

東海大学工学部土木工学科
2015年度推薦候補者 個別課題1 評価表

推薦候補者: ○○高校 ○○○○さん

評価項目		非常に良い A	良い B	努力を要する C
1	課題に対する整合性 (「課題a」、「課題b」両方に答えているか、内容は適切か等)	A	B	C
2	書式 (誤字・脱字が無いかな)	A	B	C
3	独創性 (自分なりの視点でまとめたか)	A	B	C
4	記述方法 (章・節などに分け、わかりやすくまとめたか)	A	B	C
5	図表 (適切に用いたか)	A	B	C
6	考察 (自分の考えを述べたか)	A	B	C
7	参考文献 (信用たる引用を行ったか)	A	B	C
評価者からのコメント		総合評価: 合・否		

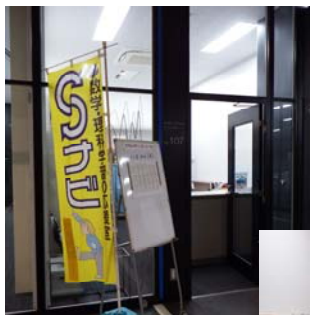
評価者	教授 杉山 太宏 専門: 地盤・環境工学 連絡先: ○○@○○.○○.ac.jp	
-----	--	--

(図1) 土木工学科の個別指導課題1 評価表

数学・理科の学習支援室 S-Navi と 学習補助学生 LS 新体制スタート 18号館にて有機的に連携（湘南校舎）

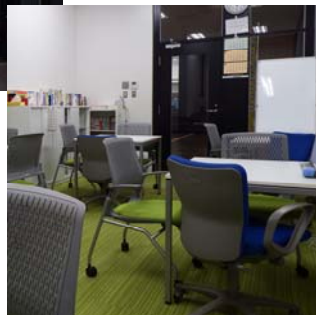
理学部・教育支援センターの取り組み

教育支援センターでは、湘南校舎6号館C棟1階にて運用していた数学・理科の学習支援室S-Naviを2014年11月5日から、18号館1階サイエンス・ステーションに移転しました。相談者の対応については、同じく18号館1階に設けられたサイエンス・スタジオや、現在、学習補助学生 Learning Supporter（以下、LS）が活動しているサイエンス・アトリウムを活用することで学習支援体制の充実を目指します。

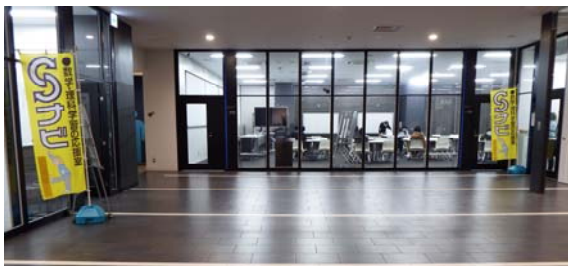


S-NAVI

■学習支援室S-Navi
受付
(サイエンス・ステーション)



■学習支援室S-Navi
相談スペース
(サイエンス・スタジオ)



■学習支援室S-Naviは、黄色い旗が目印です。
左側が受付となるサイエンス・ステーション、
右側がサイエンス・スタジオです。

■学習支援室S-Naviの歴史

教育支援センターは、理学部の協力の下、湘南校舎における理工系の学習支援を目的として、2008年度春学期に個別相談に対応する学習支援室S-Naviを6号館C棟1階に開設。当初は、月曜日～土曜日の11時～18時（土曜日は17時）に開室していました。その後、利用状況等を踏まえた運営の見直しが行われ、移転後の現在も、月曜日～金曜日の昼休み(12時35分)～18時の時間帯で開室し、理学部専任教員2名、非常勤講師2名、大学院生(TA)2名が個別相談を受ける体制をとっています。2013年度は、1日平均来室者数：10.0名、合計来室者数：1,635名でした。

■学習支援室S-Naviと学習補助学生LSの連携

2014年度春学期から、学生相互の学習支援体制として、理学部においてLSを試行的に導入しています。現在、18号館1階のサイエンス・アトリウムにて月曜日～金曜日の13時～18時の間で1名の学士課程生が相談対応をしています。

学習支援室S-NaviとLSは、表のようにそれぞれが特徴を持っています。今回、学習支援室S-Naviが18号館へ移転したことにより、相談スペースが広がっただけではなく、それぞれの特徴を生かしながら有機的に連携することができる環境が整いました。これにより、学習支援を行う上で、相談者の受け入れ体制の強化及びサービスの向上につながる事が期待されています。

今後も教育支援センターでは、理学部の協力を得ながら、更なる学習支援体制の充実に向けて取り組んでいきます。

学習支援室S-Naviと学習補助学生LSの特徴

	学習支援室S-Navi	学習補助学生LS
相談スタッフ	教員、大学院生(TA)	学士課程生
相談内容	理工系の基礎的な勉強（数学、物理学、化学）を個人のレベルに合わせて指導する。	頼りがいのある先輩が、レポートの書き方や勉強についてアドバイスする。

E-NAVI 英語学習支援室

湘南校舎1号館2階にて 開設中！

2010年度より開設しているE-Naviでは、英語の学習相談はもちろんのこと、留学やレベルアップに必要な学習指導も行っています。

月曜日～金曜日 11時～18時
(授業期間・定期試験期間)

- ・専任教員：1名
- ・非常勤講師：1名
- ・大学院生(TA)：1名 が個別対応します。

◆ 1日平均来室者数 17.2名
来室者数 2,808名 (2013年度実績)

JMOOC講座開講に向けて (Japan Massive Open Online Courses)

海洋学部の取り組み

本学のJMOOC講座第1号「海から考えるこの星の未来:海洋学への誘い」の制作が進んでいます。今号では、JMOOCと海洋学部の取り組みについてご紹介します。

■JMOOC (Japan Massive Open Online Courses)とは

近年、欧米諸国を中心にMOOC (MOOCs)と呼ばれる教育サービスが急速に広がりを見せています。MOOCとは、大学レベルの講義をインターネットを通じて無料で一般社会に配信していくもので、一定の条件を満たすと受講生には修了証が発行されます。講座としては1回およそ10分程度の動画を週5本、4週間ほどで修了できる形式で提供されているものが多くなっています。適切なインターネットの環境さえあれば世界中の誰もがこれらの講座を受講することができますが、日本人にとっては講義がすべて英語で配信されることが、受講への一つの大きなハードルとなっていました。

このような背景を受けて、日本版のMOOCの普及・拡大を目指し、2013年にJMOOC(日本オープンオンライン教育推進協議会)が設立されました。2014年4月に3講座が開講したのを皮切りに、現在までに日本国内の大学(または大学に準じた組織)が講座を順次開講しています。(講座についての情報はJMOOCホームページ <http://www.jmooc.jp/> で確認できます。)JMOOCはまだ始まったばかりの取り組みですが、1講座につき数千~1万人程度の受講生が登録しています。他に例を見ない規模で、一度にこれだけ多くの方々に大学の知を届けることができる媒体として注目を集めており、東海大学においても今年度はじめより開講に向けた準備を進めてきました。

■本学海洋学部での取り組み

本学のJMOOC講座第1号として、大学院の改組を控えた海洋学部(千賀康弘教授 他)が「海から考えるこの星の未来:海洋学への誘い」(図1)という講座を2015年2月より開講予定です。本講座の特徴としては、他大学の講座には見られない17名もの教職員が講師として登場することが挙げられます。これは、海洋学という学問領域の多様性を受講生にそのまま伝え、さまざまな角度から「海」を見る視点を与えることで、受講生たちが自ら調べ、情報交換し、考えを深めていくことを期待してのことです。

■登録方法および受講開始から修了まで

JMOOC 公式プラットフォーム OpenLearning, Japan (<https://open.netlearning.co.jp>)で会員登録を行ったうえで、東海大学の講座を選択し、「受講登録」をします。受講開始日がくると実際に講義を受講することができるようになるので、パソコンやスマートフォン、タブレット端末などを通じて講義(動画)の視聴や課題の提出を行います。開講期間中は受講生や担当教員らが意見交換できる「掲示板」がプラットフォーム上に設置されるので、分からないことや調べたこと、考えたことなどをここに書き込み、受講生同士で教えあい、議論することができます。最終レポートの提出など最終的に定められた修了条件を満たすと、修了証が発行されます。



■プロモーションビデオ撮影の様子

テーマ		概要	
海から考えるこの星の未来 : 海洋学への誘い			
募集開始:	2014年12月予定	開講予定:	2015年2月予定
第1週	テーマ: 今、世界の海で何がおこっているか 地球環境問題・国際社会・生物・資源開発の視点から、海で何がおこっており、何が問題になっているのか整理し、自ら調べて、情報と意見を交換する。		
第2週	テーマ: 海洋のメカニズムと働き 第1週目で提起された海に関する諸問題を理解するために必要な海洋のしくみと役割を理解し、海洋の基本的な物理・生物・地球科学的なメカニズムの知識を深める。		
第3週	テーマ: 海洋生物の神秘を探る 海洋から受ける生態系サービスについて理解し、関連する海の諸問題を科学的に理解する。海の多様な生態系を知り、海洋生物の恩恵をヒトが受けるしくみを理解する。		
第4週	テーマ: 海を守り、育む取り組み 海を守り、育むさまざまな取り組みの例を紹介し、その課題と可能性について考える。海を守り、活かしていくためには、今後どのような取り組みが必要なのか意見交換を通じて考えを深める。		

(図1) 講座概要

FD、SD、教職協働 について情報をお寄せください。(校舎、学部、職場単位で取り組んでいる活動等)

教育支援センター教育支援課 Tel:0463(58)1211(代) E-mail:shien@tsc.u-tokai.ac.jp